

面おもてと翳かげり

何年ぶりかで和辻哲郎の「古寺巡礼」を読んでみた。その最初のほうに次のような一節がある。

「京都から奈良へ来る汽車は、随分きたなくガタガタゆれて不愉快なものだが、沿線の景色はそれを償うて余りがある。桃山から宇治あたりの竹藪や茶畑や柿の木が多い、あのゆるやかな斜面は、いかにも平和ないい気分を持っている。茶畑にはすっかり覆いがしてあって、あのムクムクとした色を楽しむことはできなかったが、しかし茶所らしいおもしろみがあった……文人画の趣味がこういう景色に培かれて育ったことはいかにももっ

釜池進

ともなこともある。

この沿線でもう一つおもしろく感ずるのは、時々天平の彫刻を思わせるような女の顔に出逢うことである。これは気のせいかも知れぬが、彫刻とモデルとの関係はきわめて密接なはずだから、この地方の女の骨相と関連させて研究してみたならば、天平の彫刻がどの程度にこの土地から生い出ているかを明らかにし得るかも知れぬ。」

私は宇治に住みついて約十年になる。だから右の一文に特に惹かれたのであるが、和辻哲郎がこれを書いたのは大正八年（一九一九）、六十三年も前のことである。今

は宅地化が進んでこれと同じ景色をととても望めないが、しかしこの文の描写と現在奈良線の車窓から見える印象とを較べてみて、それほど異和感がないのに救われる思いがする。また、この沿線に出逢う女性の顔に天平の彫刻を思わせるものがある、というのとはとてもおもしろい。その時和辻哲郎は、やはりあの天平美人の典型といわれる吉祥天女を想い浮かべていたのではないだろうか、あるいは hands 観音像などの顔をそれに重ね合わせて、観察したのかもしれない。吉祥天女となるとその顔立ちはとてもふくよかで、第一に丸顔、そしておおかさとやさしさが満面にあふれているようだ。こんなことに共感を覚えて、私は宇治の古くからある家並で出逢う女性の顔な気をつけて見るようになったが、時代のせいのかその種の容貌をついぞ見かけなかった。しかし最近になってふと思ひあたることがあった。私が時々お茶を求めに立ち寄るお茶屋さんは、もう何代もこの土地で茶園を営んでいる旧家である。そこにもう七十にはなると思われるおばあさんがいて、いつも店の奥まったほの暗いところで仕事を

しておられる。このおばあさんは実に美しい顔をしていらっしゃる。この頃の若い女性にはあまり見かけない面立ちで、どこことなく素朴で品位がある。このお年でこれだけの雰囲気を持っているのだから、若い時にはもっと顔の肉づきも豊かで、ふっくらとおおらかな顔立ちであつたらうと思われる。そして和辻哲郎が言及しているのは、もしかしたらこういう女性のことではないか、いやきっとそうだと日がたつにつれて確信するようになり、何日も気になつていた胸のつかえがやっとこれでとれたような気持ちになつた。

「丸顔に愁なし」と言つたのはたしか夏目漱石である。漱石流に言えば吉祥天女は「愁なし」の顔ということになる。そしていつの時代からであらうか、面長の女性が美女の典型となつたようだ。時代がくだつて源氏物語絵巻に描かれている十二単衣に身を包んだ宮廷女性の面立ちは全てといつてよいほど面長にできている。眉を高く描くという面づくりは、丸い顔をも長く見せる効果があるし、第一「もののあわれ」を主調にしているのだから、丸顔では話にな

らない。天平時代の吉祥天女などと較べると対照的といつてよい。英国のチャールズ王子の顔などを見ると、頭の端と顎とを持って上下に引っぱつたのではないかと思えるほど長い。しかし、ものの本によると英国王室ではあのように長い顔でないといけないそうである。中国にもこんな話がある。芭蕉が「奥の細道」の中で象潟きさかたの風光を賞でて、「象潟や雨に西施がねむの花」と詠んだその西施は、呉の王・夫差がその色香に溺れて国を傾けるに至つたほどの美女だつた。西施は常に笑わず、憂愁の皺を眉に寄せていたため、時の女性たちは美醜を問わず、争つてその表情を真似したといふ。ここに浮んでくる西施の顔立ちは、やはり面長である。面長だからこそ眉に皺を寄せても絵になるのだ。これらの例だけで結論は出せぬが、しかし洋の東西を問わず、宮廷では面長の顔を良しとする風潮があるように思える。

室町時代に発展し、今日に至っている能楽の女面などでは丸顔は一つもない。もちろんそれは能の演出と舞台効果のためにつくられた造型ではあるが、そのうちで強い

て丸味をおびている面おもてはやはり、十四・五歳の女性の表情を写したとする小面こおもてぐらいのものである。中でも顎の肉づきこもつきに一番若さが強調されているが、ほほ、鼻の厚みも他の、たとえば「若女」、「孫次郎」などそれよりやや年上の女性の面に較べてかなり厚い。数年前に手なぐさみに能面を彫る（正しくは「打つ」）ことを習い始めた。そして女面を彫っていると、面の種類によって異なる顎、ほほ、鼻の肉づきの程度、あるいはその落し方に一番苦労する。機会あるごとに古面のいいものはできるだけ見るようにしているが、あそこまであらゆる舞台の効果を考えて作り出した先人の卓越した感覚と技術に感嘆せざるを得ない。

眉を剃り黛を描く効果について谷崎潤一郎は、これが闇の中に黄色の顔をいかに白く浮かびあがらせるかの手段である、と言っている。また、鉄漿てつじやうについて「私は蘭燈のゆらめく蔭で若い女があゝの鬼火のような青い唇の間からときどき黒漆色の歯を光らせてはほ笑んでいるさまを思うと、それ以上の白い顔を考えることは出来ない」とも言っている。「青い唇」と書いているが、

実際は紅色で、光のかげんで鉄漿の黒にも影響されてそのように見えたのであろう。

谷崎のこの指摘で思いつくことがある。私の知っているある能楽師が「新しい面はいくら色濃くぬられていても舞台にそれをつけて立つと白っぽくなり過ぎていけません。そこへいくと古面は一見白っぽいのですが、舞台では非常に落ちていた色になり面がしまります」と語ってくれた。江戸以降の能面作家に課せられた仕事は忠実に古面の典型を模倣することであった。その制作の最後の段階で最も苦勞するのは古びた感じを出すために古色をつけることである。

この古色の施し方は各能面師の秘密で仲々教えてくれない。しかしたとえうまく出来たところで舞台に出してみると白っぽくて使いものにならない場合が多いそうである。古面は表面上白っぽく見えても何百年という年月の間に胡粉と色の色素が風化して、光を吸収するので多分あのような落着いた色が出るのだと自分なりに考えている。特にこの頃のように電燈の明りの下で演ずる場合にはその差はよりきわ立つ。

谷崎は「陰翳礼讃」の中でまた次のよう

に書いている。

「もし日本座敷を一つの墨絵に喩へるなら、障子は墨色の最も淡い部分であり、床の間は最も濃い部分である。私は数寄を凝らした日本座敷の床の間を見る毎に、いかに日本人が陰翳の秘密を理解し、光りと蔭との使ひ分けに巧妙であるかに感嘆する。要するに唯清楚な木材と清楚な壁とを以て一つの凹んだ空間を仕切り、そこへ引き入れられた光線が凹みの此処彼処へ朦朧たる隈を生むようにする……思うに西洋人の言う『東洋の神秘』とは、斯くの如き暗がりを持つ無気味な静かさを指すのであろう。」

この陰翳が生み出す効果は能の場合も例外ではない。否、それがなければ「幽玄の美」などという世界は出来ないのである。日本の漆ぬりの膳や椀も燭台の下のぼんやりした明りの下でこそ日本の漆器の美しさは始めてほんとうに発揮されると谷崎は語っている。能の面も同じである。また金糸・銀糸をふんだんに使っている能衣装も日本の陰翳の中でこそ最も深遠な美となって生かされるのである。そしてその上にの

る面は丸顔であつてはかつこうがつかない、やはり面長な顔をのせるのが当然の理である。

あの宇治のお茶屋の薄明りの下で仄見えた、紺とも黒ともつかぬ、蔭にとけ込むような着物をまとったおばあさんの姿は、その顔だけが深い翳の中に白く浮かんでいた。あのような面立ちや、それを美しく浮かび上らせてくれる陰翳も現代では「亡び」の過程を歩んでいるのではないだろうか。そして「東洋の神秘」なるものは増々芸術の中だけに閉じ込められていきそうな気がするのである。

(大学経済学部教授)



遅まわし早まわし

笹野 貞子

ある大手の電機メーカーから講演を頼まれた時のことである。

「これは当社の最新型です」と、一台のテープレコーダーをご褒美としていただいた。

機械の操作にあまり自信のない私は、それをもって、現代っ子ぶっている娘に見せびらかしながら、早速使い方を説明した。

赤や緑で色分けしながら、複雑な使用方法が表示してある。最新式というのはどうしてこんなにめんどくさくしなければならぬのか、押すだけ、にすれば良いものを——と内心思ったものだが、娘の手前すべてを理解したような顔をしていたものだ。

そんな複雑な中で、一つだけ気に入ったものがあつた。それはテープの回転速度を

自由にできるメーターがついていたことだ。こんな原理は古くからあつたことだろうけれど、あいにくそんな装置のついたものを、私は持っていなかった。

「一生懸命講演したおかげで、こんないいものをご褒美にもらつて本当によかつた」と、私はオーバーに喜んだものだ。何故なら、以前より聞かなければならない会議や講演のテープが沢山たまつていたからだ。私のもっているテープレコーダーでは二時間のものは二時間かかるし、三時間かかるものは三時間かかる。あたりまえの話だ。だから、二時間かけるにふさわしくない、つまらないことに多くの議論をしている会議のテープとか、女性蔑視の思想でありながら口先だけでごまかすずい講師のテープなどに、また同じ時間をかけるのは

いかにも残念でしかたないと思つていた矢先だつた。

早速、速い速度にしてまわしてみた。ピイピイ、ピイピイと高音にはなるが、それでも会話は聴きとれる。宇宙人の会話ぶりではあつても、二時間テープが三十分近くも早く終つた時は、すぐく時間を得てしまったように感じるのは冒瀆だろうか。

たしかに、人類は時間との挑戦によつていろんな文化を創り上げて来ただろう。そしてその効果は、限られた一生の中で多くの経験を可能にした。しかしどんなに多くの事を人生の中でやつてのけたとしても、その結果が心とならなければ、ただ時が体を過ぎ去つたと同じことではないだろうか。

ただひとときでも、時を本当の人生としたとき、その時を、速まわしではなく、遅まわしにして何度も聴きたい大切なテープをもつたように、私には思われるのである。

車中で一泊を過ごした乗客たちは、青森駅の深夜のホームを黙々と連絡船の乗り換え口歩いて行く。昭和二十七年といえは、

今からちょうど三十年も前のことになるの
だろうか。京都から北海道の郷里に帰るに
は二泊三日の旅程だった。受験も入学式も
母が付き添ってきた過保護の私には、最初
の夏期休暇の帰省が初めての一人旅であ
る。過保護ではあったけれど、二泊三日と
いう長い道程も母の付き添うもう一つの理
由でもあった。昭和二十七年といえ、戦
後の混乱はある程度おさまったとはいえ、
女性の一人旅にはあまりにも不便だった時
代だ。

現在ではよほど辺地のローカル線にしか
使われていない、堅く狭い座席に丸一昼夜
座り詰めというのは、まさに難行苦行。連
絡船に乗り込むと、旅慣れた乗客たちは待
っていたかのように寝息をたてている。
ドラの音の感傷がますます不安を募らせ
る私は、とても寝付くことができなかった。

左右に揺れていた連絡船が、だんだん外
海に出てきたのだろうか、揺れがひどくな
ったと思った矢先、突然左右の揺れが上下
に変わったのである。私は体中に悪寒が走り
全身から冷や汗の流れるのを覚えた。息が

苦しくなり胸が詰まり、吐気を感じた。「ど
うしよう」と思ったが、体がいうことをき
かない。これが船酔いなんだろうかとか私は
思いながら、ハンカチを口にあてたままう
ずくまった。とにかく胸につき上げるもの
を紙で処理しながらこらえようと思ったが
知らず知らず呻いていたに違いない。もし
「死にもまざる苦しみ」というのがあれば、
こんなことをいうのだろう。私はこの地獄
のような苦しみを何十時間も味わっていた
ように思えたが、実際はそんなに長い時間
ではなかったのかもしれない。

その時、一人の男性が近づいて来た。「苦
しそうですね。この薬はよく効きます。僕
も時々船酔いしますから持っているんで
す。お飲みなさい」と言って、私の肩に手
をかけて起こすようにした。私はもう目が
かすんで彼の顔をよく見られなかったが、
その時K大学の帽子だけは確認した。私は
礼を言おうと思ったが、言えは吐きそうな
感じがしたので、やっとの思いで薬をつま
んだ。彼は私の体を抱えるようにして起こ
し、金属製のコップに水をくれた。たぶん
彼が持ってきた水筒だったのだろうか。私

は彼の腕に支えられながらお薬を飲み干す
と、崩れるように横になった。その時彼は
また、連絡船に備えつけてある小さなゴミ
箱を持って来て横に置いてくれた。

船窓から差し込む朝日の光で私は目を覚
ました。あまりにも爽快な目覚めに、あの地
獄のような苦しみは夢だったのだろうか、
と思った。しかし彼が持って来てくれた小
さな箱の中に、その苦しみのおとが残って
いた。やっぱり私は彼に助けられたんだ。
そう、彼に一言礼を言わなければいけな
い。そして彼の名前を聞きたいと思いた
ち、ガバと立ち上がった。

彼の紳士的親切さに精神的不安感が吹き
飛んだのか、それともお薬が効いたのか、
私はぐっすりと深い眠りに落ちていったの
であらう。もう船は函館の棧橋に接岸し、
乗客たちは下船の用意をして出口に並んで
いた。私が当然最後の客だった。私は慌て
て彼を探そうとした。ずっと遠くの出口の
ところに彼の帽子が見えた。けれど、大き
な荷物を沢山持って並んでいる乗客の列に
わけ入り、彼のそばまで行くまでの時間が
なかった。

下船する時、彼は振り返った。私は思わず手を振った。彼は私を見つけてにっこり笑いながら、手を振り返した。遠くから見た彼は、すらりと背が高く、ほっそりとした面長な顔にやさしそうな目鼻立ちだった。そして三回生か四回生か、私より先輩のような頼もしさを感じさせた。お礼を言いたい、名前を聞きたい、そしてもう一度しっかりと顔を見たいと、少女的なあこがれも手伝って、心焦りはしたものの、函館駅の長いホームについていた時、行き先の違う三本の列車は、彼と再会できる時間を私に与えずに発車したのである。

あまりにも遠くから見たやさしそうな彼の顔、今私はおぼろげにしかわからない。

この出来事は、他人に手を貸す余裕のなかった私に「良心を全身に充し……」という同志社の精神を、生きた言葉として人生に受けとめる素地をつくった最初の感激であり最初のムチでもあった。

最近、ひょっこり会った友人から、一緒に学び、久しく会っていないA女史の話を聞かされた。

彼女はとても恵まれた家庭婦人になって

いるということだったが、こんな言葉が何かしら気になった。というのは、出来の良いい息子ばかりで、彼女はすっかり教育ママ。昨年は長男を有名大学のT大に合格させ、来年は次男坊もT大に入れるためがんばっているというのだ。ところが、彼女の夫もT大で、家族そろってT大で思考の中で彼女は軽い存在として扱われ、子どもたちの前では、母親の大学生活や勉強の仕方のことを一切口にせず、次男坊をT大に入れるために、自分の人生を忘れるように努力しているのだという。

ある時、私の娘がこんな会話を切り出した。「ママ、ママの人生にそれほど大きな影響を与えている同志社という学校は、どんな学校なんだろう。きつといえんだろうね。私も入ってみようかな」と。

小学生にしては、少々こましゃくしてくれているとは思ったが、それから俄然勉強して入学した。今、学校に通うのが楽しくて仕方ないと言う。

どこで学ぼうと、学ぶ素地をしっかりとつけさせることが、教育ママの役割ではないだろうか。

どんな優秀な大学でも、唯入るだけで時は素通りするだけだ。もしも私の娘が他の学校を希望したとしても、私は自分の人生を忘れて娘を希望校に入れることは決してしないだろう。

こどもというものはどんな方向に進もうとも、親の人生を理解し、認めた上で親を乗り越えなければいけないからだ。

私はA女史の不幸に余計な同情を感じながら、娘にわめいたものである。

「ママの人生を一本のテープにしたなら、決してこの最新型に入れて早まわしにしたり、消却したりすること相成らんぞ」と。とたんに娘曰く「ママのような早口テープを早まわしにしたら最新型でも故障する」と。これであのK大生から受けた人生への最初の感激も遅まわしにしながら、娘の一生の中でも生き続けるだろう。

今でも私は、K大生がいると、時のたつたのも忘れて、彼ではないかと顔をのぞき込むことがあるのだ。

(昭和三十七年大学院法学研究科修了、堺女子短期大学教授)